

福井震災の記憶の継承における「復興観音」の役割

大学共同利用法人人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館* 高野 宏康

Consideration about the Role of the Fukui Restoration Kannon
in the Succession of the Memory of the Fukui Earthquake Disaster

Hiroyasu TAKANO

National Museum of Japanese History
117 Jonai-cho, Sakura City, Chiba, 285-8502 Japan

The Fukui restoration Kannon plays an important role as disaster culture to introduce the memory of the Fukui earthquake into. That Kannon is a tradition created after an earthquake disaster newly. The characteristic is that a temple petitioner becomes the commoner. “Goeika-no-kai” is held as well as memorial service event in each label place and takes the role of the certain local community. In other words, it is thought that the Fukui restoration Kannon is not a simple monument, but functions as a system conveying the memory of the earthquake disaster that connected administration of Fukui city, a local community, and local inhabitants.

Keywords: Disaster Culture, Monument, Memory, Belief in Kannon, Fukui Earthquake

§1. はじめに

近年、追悼碑や記念碑などの災害の記憶を伝える様々なモニュメントの重要性が指摘され、研究が進展している。1948年6月28日に起こった福井震災でも、福井市内や被災地全域に多くのモニュメントが建立されている。それらの内、取りわけ重要な役割を果たしているのが、「復興観音」である(図1)。



図1 「復興慈母観音」像(瑞源寺)
Fig.1 The Statue of restoration Kannon in Zuigenji Temple.

福井の「復興観音」では、「西国観音三十三札所」になぞらえ、福井震災の被災地全域にわたって33の札所を設置し、各地で「復興観音」を中心とした慰霊法要が営まれている。福井市の公的な追悼行事が行われる足羽山の福井市慰霊塔内部には最初に建立された「復興慈母観音」像(親観音)が安置され、慰霊の中心となっている。また、毎年8月の観音功德日には巡拝会が開催され、一日のうちに全ての札所を巡拝している。

「復興観音」は、近世以来、各地に開設された「西国観音三十三札所」とは異なり、戦後になって新たに「創られた伝統」である。その大きな特徴となっているのは、願主が寺院ではなく在家中心となっていることである。また、各札所では慰霊行事だけでなく、ご詠歌の会が開催されるなど、ある種のコミュニティの役割も果たしている。つまり、「復興観音」は、単なるモニュメントではなく、行政、地域社会、住民を密接に関連づけた震災の記憶を伝える災害文化として機能していると考えられるのである。

以上の様に、「復興観音」は非常に重要な役割を果たしているにもかかわらず、これまで先行研究はなく、一部の震災誌等で簡単に紹介されている以外は、福井震災に関する研究書や文献でもほとんど言及さ

* 〒285-8502 千葉県佐倉市城内町 117
電子メール: htakano2009gm@gmail.com

れていない。地元でもその由来が忘れられつつある。本稿では、「復興観音」の成立過程、特徴、地域社会での受容のされ方などについて考察することで、福井震災の記憶の継承における「復興観音」の役割を明らかにしてみたい。

§2. 「復興観音」の成立過程

福井の「復興観音」は、当初、福井空襲の犠牲者供養と戦災復興を祈願して1946年7月に建立されたが、1948年6月に起こった福井震災の一年後には、震災の犠牲者供養と震災復興の祈願が含められるようになった。「復興観音」の創設経緯に関しては、創設者側の資料[福井宗教文化協会(1946, 1949, 1951), 前田(1952)], 札所会が作成した巡拝案内の冊子[復興慈母観音札所会(1998)], 有志が作成した案内書[福井市宮ノ下千寿会編(2009)]などがあるが、各札所側の受け入れの経緯などについては資料がほとんど存在しないため、聞き取り調査で補足した。

以下では、それらの資料に基づき、「復興観音」の成立過程を明らかにし、創設の背景とその意義について考察する。

2.1 戦災後に建立された「復興観音」

「復興観音」の建立事業は、1945年7月19日の福井空襲で亡くなった約1,600人の供養と福井市の復興を祈願するため、翌1946年7月15日に、戦災からの福井の復興を目指す「福井宗教文化協会」が、福井駅前商店街の「復興市場」に発願所を設置することに始まる。発願所には、当時の福井新聞社社長・吉田円助から寄贈された観音像が祀られた[福井宗教文化協会(1946)]。当時、闇市となっていた駅前商店街に安置されたこの観音像は、敗戦後の福井市民を奮い立たせたといわれる(福井新聞, 1963年6月29日付)。

この時、掲げられた「復興観音建立趣意書」には以下のように記載されている。「凡ての恩讐を乗り越え怨親平等大慈大悲一切の苦難を救ひ給ふと伝へられる慈母観音像を建立し、復興観音と名づけ奉つて朝に夕に其の慈顔に接しますことによつて、一つは吾々がともすれば荒みがちな苦しい生活の中からその乏しきを分かち合つて、我儘勝手な個人主義から、ほんとうの自由主義を学び取る象徴としたいと存じます」。また、市民から寄付金を募ることについて、「その信者たると否に拘わらず、多少共浄財を喜捨下さることによつて仏縁を結んでいただきたいと存じ復興

市場へその発願所を設けた次第であります。さうして大衆の皆さんによつて来年の復興記念日にその建立を致すべく計画したのであります」と説明している[福井宗教文化協会(1946)]。

観音像を「本当の自由主義を学ぶ象徴としたい」という発想からは、「復興観音」が単なる近世以来の観音信仰ではなく、戦後の時代相を反映した理念が込められていることがうかがえる。復興市場に発願所を設置したことについては、広く一般らの寄付金を募るためであったことがわかる。

「復興観音」を製作する案については、戦前から観音像の収集を行っていた松島格太郎(当時、福井県民生部労政課長)を中心に進められていたが、松島が福井宗教文化協会に参加するにともない、会の発足記念事業となった[松島格太郎伝記編纂委員会編(1975)]。観音像の製作にあたっては、彫刻家の雨田光平の推挙により、当時、大野市に疎開していた仏像彫刻家の多田瑞穂に依頼することになり、募金活動を展開することになった。多田によって作製された「復興慈母観音」は、観世音菩薩が、愛児を抱き寄せようとする構図で、母性愛をシンボライズしたものであった。この構図は、明治期の画家・狩野芳崖が描いた「慈母観音之図」に構想を求めたものであったという。そのため、従来の観音像とは趣向を異にするユニークな作品となっていた[「福井県文化史」編集委員会編(1963)]。

募金活動は順調に進展し、酒伊繊維株式会社・社長の酒井伊四郎からの10万円、地元の百貨店、だるま屋店主・坪川信一が多額寄付金などをはじめ、寄付金が数十万円近くに達したため、翌1947年7月には製作費を支払うと同時に福井市東別院内に観音堂を建立し、内部に「復興慈母観音」を安置した。

開眼式には、大本山永平寺貫首の熊沢泰禅のほか、福井市長・熊谷太三郎、福井銀行頭取・市橋保次郎など多数の有力者が参列し、盛大に開眼法要が営まれた[「福井県文化史」編集委員会編(1963)]。これが現在、足羽山慰霊塔内に安置されている観音である。

2.2 震災後の「復興観音」

東別院境内の観音堂に安置されていた「復興慈母観音」は、1948年6月28日に発生した福井地震によって倒壊したが、「復興慈母観音」像は「奇跡的」に火災も免れ、ほとんど無傷に近い形で発見された。そのため、この観音像は霊験あらたかな観音像として人々

の信仰を集めるようになった。観音堂が焼失してしまったため、近くにあった福井宗教文化協会の前田岳洋の自宅(福井市宝永町)に移され、安置されることになった。

前田は観音堂の再建を願っていたが、1957年に前田が死去したため、存命中には実現しなかった。観音堂再建は、1961年、福井宗教文化協会の会員(酒井慶久、竹内武、梅田栄孝、沢村伍郎ら)の尽力により、当時の福井市長・坪川信三、同助役・藤田善男の協力を得て、実現されることになった。「復興慈母観音」像は、足羽山公園内の共同墓地に近い山頂に建立された福井市慰霊塔の中央に安置され、現在に至る。この点についてはあらためて検討することにする

§3. 2種類の復興観音三十三札所

以上のように、福井の「復興観音」は、福井空襲と福井震災の両方の要素を持っていることに加え、福井市内と福井市外で異なる2種類の三十三観音札所が創設されたことで、その違いが分かりにくくなっている(図2、図3)。以下では、2種類の復興観音三十三観音札所の成立過程と特徴について考察を行う。

3.1 「復興慈母観音三十三札所」の開設

1949年1月、前田岳洋により、「西国三十三観音霊場」になって、「復興慈母観音」の分身三十三体をもって札所を開設するという案が出された。前田は、福井宗教文化協会の会員であった、当時の福井県知事・小幡治和、坪川信一、市川保次郎らに相談したところ、賛同を得たので、「復興慈母観音」に誓願を建て計画を進めることにした。賛同者を募ったところ、たちまちのうちに願主希望者が集まり、数ヶ月後の同年5月28日には稚児行列とともに三十三観音の納入式が行われ、それぞれの札所の願主に配分された。

「慈母観音三十三札所開設趣意書」[福井宗教文化協会(1949)]には、「敗戦という厳しい現実の中で平和日本国という新日本を再興しようとする大変換期に直面して在来仏教の在り方が見直されることは当然である」とし、「仏教が僧侶や伽藍形式だけのものだけでなく、一般社会人の日常生活の中に生かされて吾々の生存に安らかな効果を齎すものでなければ無意義である」と主張している。また、「僧俗を問わず観音を信じる者達によつて慈母観音分身三十三札所を発願し、そして自ら観音を奉じ巡拝三十三所としての祭事を行じまつる」としている。「復興観音」が、一般

社会人の日常生活の中に生かされることが理念として主張されていることがわかる。

同年6月28日の震災一周年記念日には「復興慈母観音札所会」が設立された。震災一周年記念日には様々な行事が行われ、福井市では午前9時20分から震災記念碑の除幕式、同日10時から福井市公会堂で、県市合同の死没者慰霊祭が行われた。また、公会堂の廊下では当日から一週間、震災復興写真展が開催されている。「復興観音」については、当日午後1時から、「復興慈母観音」の開眼式、そして「観音祭」(分身である三十三札所の自転車巡拝、バス巡拝、巡拝マラソンなど)が行われている[福井市編(1978)]。自転車、バス、マラソンとさまざまな手段で巡拝が行われており、当時、非常に参拝者が多かったことがわかる。発案者の前田岳洋は、震災記念日には毎年一斉に観音祭を行い、福井市の例祭として継続させる構想を持っていた[福井宗教文化協会(1949)]。

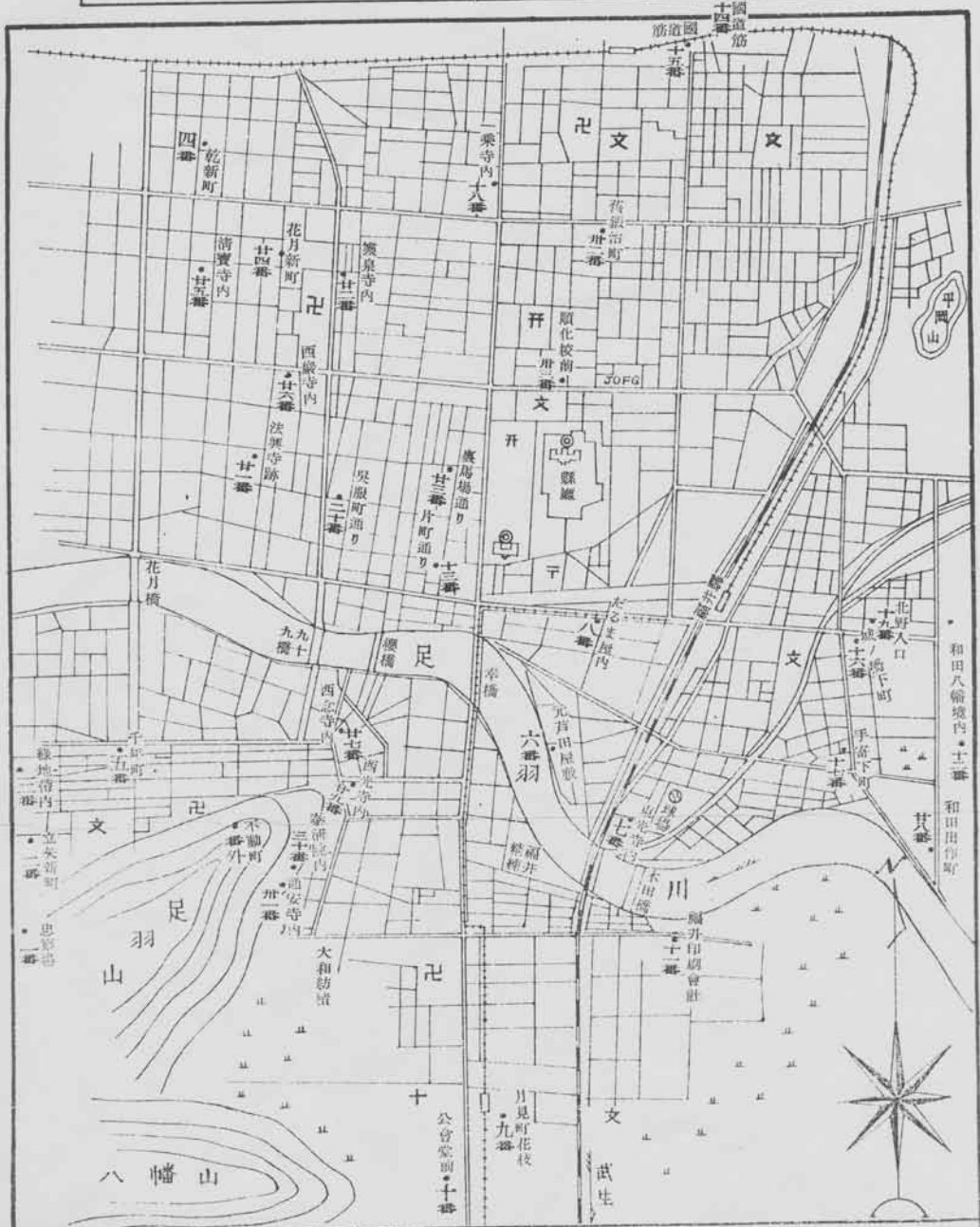
現在では、「四万八千日」の観音功德日に、「復興慈母観音札所会」はバスで三十三札所を巡拝する会を開催している。「四万八千日」とは、観世音菩薩の縁日の一つで、この日に参詣すると四万八千日参詣したのと同じ功德を積むとされ、旧暦の7月9日・10日がその日にあたり、現在、巡拝会は8月9日に固定されている。

「復興慈母観音札所会」の最大の特徴は、創設当時、各札所の願主が在家中心であったことである。その点で従来の寺院中心の観音霊場とは際だった相違がある。表1「復興慈母観音札所一覧」を参照すると、創設当時(1949年)、33札所のうち20ヵ所が在家の願主となっていたことがわかる。在家の願主は、「戦災・震災で身内を亡くした人や、多くの犠牲者を出した地区の方々が進んで願主として名乗りを挙げた」と説明されているが[福井宗教文化協会(1949)]、福井新聞主筆の沢村伍郎や、加賀産業の加賀辰五郎、だるまや店主の坪川信一ら、当時の福井市の各界の有力者が加わっていたことも重要である。在家願主が多いことで、「復興観音」は福井市民にとって身近な存在となったといえよう。

3.2 「越之国復興観音三十三札所」の開設

「復興慈母観音三十三札所」の開設が成功したことで、福井市外の震源地により近く被害も大きかった地域(坂井郡、吉田郡、足羽郡)にも同じく三十三ヵ所の観音霊場を開設してはどうかという声が起こった。

福開市慈母觀百參詣ノ所ノ地圖



- 一 萬葉觀音
- 二 八代觀音
- 三 桃岡觀音
- 四 乾觀音
- 五 立矢觀音
- 六 豊島觀音
- 七 東光觀音
- 八 花枝觀音
- 九 花堂觀音
- 十 福印觀音
- 十一 福印觀音
- 十二 福印觀音
- 十三 德久觀音
- 十四 國道觀音
- 十五 城東觀音
- 十六 手寄觀音
- 十七 浪花觀音
- 十八 北野觀音
- 十九 照手觀音
- 二十 吳服觀音
- 二十一 乾德觀音
- 二十二 貨泉觀音
- 二十三 花月觀音
- 二十四 西光觀音
- 二十五 西山觀音
- 二十六 足羽觀音
- 二十七 出作觀音
- 二十八 相生觀音
- 二十九 山手觀音
- 三十 山手觀音
- 三十一 山手觀音
- 三十二 山手觀音
- 三十三 不動觀音

図2 「復興慈母觀音三十三札所」分布地圖 [前田(1952)]

Fig.2 The map of stamp office for the 33 temples that are visited during the restoration Kannon Pilgrimage.

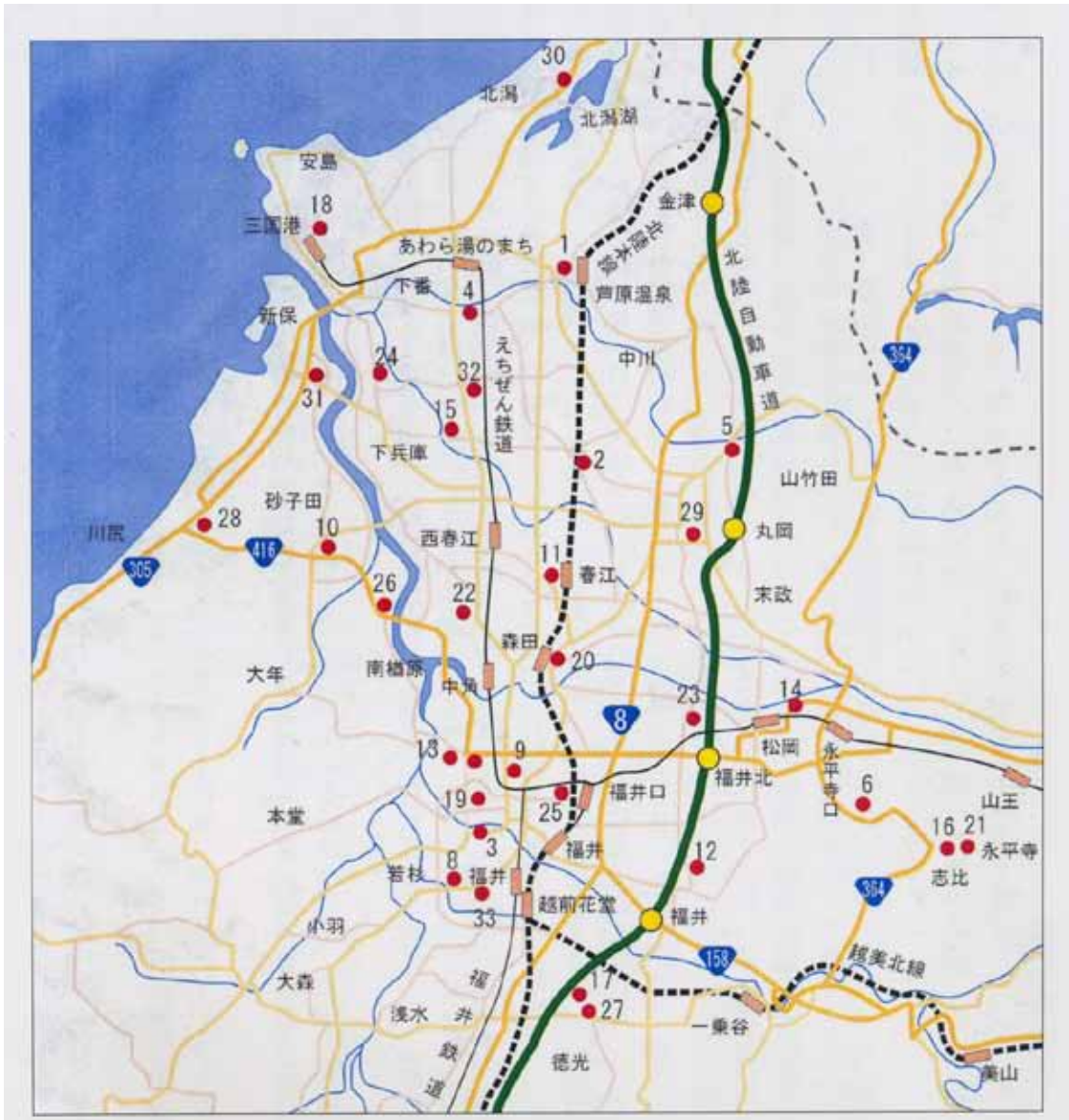


図3 「越之國復興観音三十三札所」分布地図[福井市宮ノ下千寿会編(2009)]

Fig.3 The map of stamp office for the 33 temples that are visited during the “Koshino-kuni” restoration Kannon Pilgrimage.

「観音信仰の厚い方々」が発起人となり、村々に観音堂を建立し、観音像を安置していき、「復興慈母観音三十三札所」開設の翌年、震災から2年目の1950年の震災記念日にはほとんどの札所の入仏式が完了し、震災被災地全域にわたる新たな三十三札所が開設された[前田(1952)]。

新たに開設された三十三札所が、福井市内の「復興慈母観音三十三札所」と混同しないようにするため、「ある高德の禅師さま」が「越前地区に在る観音札所」という意味で、「越之國観音三十三札所」と名付けたといわれる[前田(1952)]。表2は「越之國観音三十

三札所」一覧である。

「復興慈母観音三十三札所」と「越之國観音三十三札所」は、「お互いに姉妹関係を結んで、衆生済度の現実的な役割を果たしていった」という[福井県文化史編集委員会編(1963)]。両札所の開設によって、福井市内と福井市外の被災地全体に、震災の記憶を伝える「復興観音」のネットワークが形成されたといえるが、現在では両者は混同されている事が多く、両者の由来や関係が見失われつつある。

3.3 「復興慈母観音三十三札所」と「越之国復興観音三十三札所」の相違点

両札所は、対象とする地域の違いのほか、いくつか異なる特徴がある。「復興慈母観音三十三札所」では、各札所の観音に、「万霊観音」「だるま観音」(図4)といった名前がつけられているが、「越之国復興観音三十三札所」には名前がつけられていない。かわりに、後者は仏教寺院とは別の独自の観音堂に安置されている札所が多く、「森田観音堂」など、札所が観音堂名で記載されている札所が存在する。案内冊子[前田(1952)]では、前者には願主名のみが記載されているが、後者には「願主名」と「奉賛会長名」が記載されていることから、「越之国復興観音三十三札所」では各札所の奉賛会が重視されていると考えられる。

札所の願主については、「復興慈母観音三十三札所」は、在家20、寺院13に対して、「越之国復興観音三十三札所」では、在家の願主13(うち観音堂が存在する札所7)、寺院が願主である札所20となっており、後者の方が、寺院が願主になっている札所の割合が多いことがわかる(表1、表2参照)。

「復興慈母観音三十三札所」では、全札所を統括する「復興慈母観音札所会」が設置され、慰霊行事や巡拝会などの札所の運営を担っているが、「越之国復興観音三十三札所」には全札所を統括する札所会は存在しない。そのため、慰霊行事なども基本的に各札所が独自に行っており、全札所を巡る巡拝会も実施されていない。これは「越之国復興観音三十三札所」が対象となっている地域が震災被災地全域と広範囲にわたることが一因と思われる。「越之国復興観音三十三札所」では、奉賛会が重視されていることと、地元の寄付を募るなどして独自の観音堂を建立していることなどから、地域との結びつきが強いことが特徴といえよう。

番外札所の有無も両者の相違点となっている。「復興慈母観音三十三札所」には、番外が10札所存在し、願主の死去などにより札所に欠番ができると番外と入れ替わることがある。近年では6番札所「豊島観音」が番外2「ふれあい観音」と交代している。番外は、創設当初は存在しておらず、札所に欠番ができるようになったことで設置されるようになったと考えられるが、設置の経緯については資料がないためよくわかっていない。巡拝会では番外札所もすべて巡拝している。「越之国復興観音三十三札所」には番外札所は存在しない。



図4 「復興慈母観音三十三札所」第8番札所・だるま観音

Fig.4 Daruma Kannon: Stamp office for temple number 8 of the 33 temples that are visited during the restoration Kannon Pilgrimage.

3.4 「西国三十三観音札所」との関係

福井震災後に開設された2種類の「復興観音三十三札所」を理解するには、その元になっている、「西国三十三観音霊場」について理解しておく必要がある。「西国三十三観音札所」とは、近畿2府4県および岐阜県に点在する観音札所の総称である。これらの札所の巡礼は日本で最も歴史がある巡礼行の一つであり、現在も多数の参拝者が訪れている。以下、浅野編(1990)、西国三十三所札所会編(2008)に基づき、福井の「復興観音三十三札所」との関係について検討する。

「三十三」とは、「観世音菩薩普門品」(『法華経』)に説かれる、観音菩薩が衆生を救うとき、33の姿に変化するという信仰に由来し、この功德与るため、33カ所の札所を巡拝することを意味し、「西国三十三札所」の観音菩薩を巡礼参拝すると、現世で犯したあらゆる罪業が消滅し、極楽往生できるとされる[浅野編(1990)]。「札所」とは、かつての巡礼者が本尊である観音菩薩との結縁を願って、氏名や生国を記した木製や銅製の札を寺院の堂に打ち付けていたことが由来となっている。「西国三十三観音札所」の由来や成立過程の詳細については省略し、ここでは近世以降、「西国三十三観音霊場」が庶民化して各地に広まっていく過程と、北陸の観音札所、福井震災の「復興観音札所」との関係について検討しておく。

近世になると、庶民の間で観音巡礼が広まり、関東の「板東三十三カ所」や「秩父三十四カ所」など東国の巡礼者が増加したことで、上方の観音巡礼が「西

国三十三ヵ所」と呼ばれるようになった。江戸時代初期から「巡礼講」が各地で生まれ、団体での巡礼が盛んになっていった。

北陸や福井周辺でも古いものから近年新たに創設されたものまで、さまざまな「三十三観音霊場」が存在する。近世から続くものとしては、「福井御城下三十三ヵ所観音霊場」が知られる[福井市歴史ボランティアグループ「語り部」編(2007)]。近年新たに開創されたものも多く、1979年に北陸の真言宗寺院が中心となって開創された「北陸観音霊場」、1982年に福井県嶺南地方、若狭国に点在する霊場を札所として開創された「若狭三十三ヵ所観音霊場」などがある。

福井震災の「復興観音三十三札所」は、歴史のある観音札所ではないが、「西国三十三観音霊場」になぞらえ、震災を契機にそれぞれの被災地域で寺院だけでなく、在家の有志が数多く願主となり、地域の状況に即した形で多様な活動を展開しているという特徴をもっている。慰霊・追悼行事など震災に直接関連する活動のほか、巡拝会や御詠歌の会など「三十三観音札所」に特有の行事もあわせて開催されるなど、創案者の前田岳洋や福井宗教文化協会によって福井震災・戦災の記憶を伝えるシステムとして工夫が凝らされ、独自性のある「三十三観音札所」となっているといえるだろう。

§4. 「復興観音」と福井宗教文化協会

福井の「復興観音」の成立には、前田岳洋と福井宗教文化協会が深く関わっている。以下では、福井震災後、「復興慈母観音」が前田岳洋宅に安置されるようになって以降の「復興観音」の動向について説明した後、「復興観音」と福井宗教文化協会の関係について考察を行う。

4.1 「福井市慰霊塔」の建立

福井震災後、東別院の観音堂が倒壊したことで、前田岳洋氏の自宅に保管された「復興慈母観音」について、別の場所に安置すべきという意見は当初からあったが、観音堂再建はなかなか実現できなかった。前田とともに「復興慈母観音」建立にたずさわった酒井慶久、竹内武、梅田栄孝、沢村伍郎らは、「復興慈母観音」は、「戦震災に労苦をなめた福井市民全員のものである」として、福井市に観音像を適切な場所に祀りたいと申し出た。福井市では申し出を検討した結果、足羽山西墓地公園の頂上に、震災復興都市計画の一つである足羽山総合開発計画に即した慰

霊碑を建立して、そこに「復興慈母観音」を祀る計画を立案した[熊谷(1963)]。

まず、1961年6月の定例会市会において、追加更正予算案に20万円を計上し、観音の由来を記した石碑を建立することになった。これは、取り急ぎ同年7月19日の戦災記念日に間に合うように製作を急いだための処置で、のちに「復興慈母観音札所会(当時は「奉賛会」)」が150万円の基金を用意し、高さ10mのコンクリート造の慰霊碑建設することになった。完成すれば足羽山の名所の一つにもなるという意図も込められていたといわれる[福井新聞、1961年6月29日付]。

記念碑の起工式は終戦記念日の8月15日午後3時から現地で行われた。慰霊碑は福井市と復興慈母観音奉賛会が協力して建立することとなり、福井市は予算20万円を用意し、奉賛会では募金を開始した[福井新聞、1961年8月13日付]。慰霊碑の除幕式は、同年11月25日午後1時から行われた。戦災犠牲者1,583柱、震災犠牲者975柱の合計2,558柱を祀り、総工費184万円のほとんどが市民からの寄付金でまかなわれた。高さ13.5mのコンクリート造の慰霊塔には、震災後から前田岳洋の自宅に保管されていた「復興慈母観音」が安置された(図5)。

除幕式では、当時の坪川市長(復興慈母観音奉賛会会長)の挨拶、北栄造福井県知事、辻広県議会議員、田辺福井市会副議長らが祝辞を述べ、戦災で母を失った真田幸雄弁護士に代わり同氏の娘・康子(12歳、宝永小学校6年生)が幕を落とした。その後、読経と焼香が行われ、遺族を代表して坂井市議会議員が感謝の言葉を述べた(福井新聞、1962年11月26日付)。



図5 福井市慰霊塔(足羽山)

Fig.5 The Fukui city memorial tower at Mt. Asuwa.

以上のように、足羽山の福井市慰霊塔の建立にあたっては、行政と福井宗教文化協会、市民の協力関係があった。除幕式では福井市、坂井市、福井県の代表が参加しており、福井全体が関わっていることがわかる。民間団体である福井宗教文化協会が創設した「復興慈母観音」は、それまでも市長ら公職に就いている人物が多数参加した公的な性格を持った事業であったが、足羽山慰霊塔が建立されるにあたってあらためて公的な性格を付与されたといえる。

足羽山の「福井市慰霊塔」では、建立後から現在に至るまで毎年6月28日の震災記念日に、多くの戦・震災犠牲者の遺族らが参列して、「復興慈母観音礼所会」主催のもとで慰霊行事が営まれている。

4.2 「復興観音」と福井宗教文化協会

ここで、あらためて「復興観音」を創設した福井宗教文化協会について掘り下げて検討しておきたい。この団体や前田岳洋については、現在では「復興観音礼所会」関係者の間でもほとんど知られておらず、機関誌などの刊行物もごく一部を除いて所在が確認されていないため実態はよくわかっていないが、これまでみてきたように、福井の風土に即したかたちで観音信仰と関連づけた震災の記憶を伝えるシステムを創案した意義は非常に大きい。

以下では、瑞源寺所蔵資料[福井宗教文化協会、(1949, 1951)]と、福井県文書館所蔵資料[福井宗教文化協会(1946)]および、『福井県文化史』『福井県文化史』編集委員会編(1963, 1980)]に基づき、福井宗教文化協会と「復興観音」について検討する。

福井宗教文化協会の出発点は、戦災の翌年1946年1月17日に芦原温泉室吉旅館の一室で第一回懇談会が開催された「黎明懇談会」に遡る。この会合には、当時の福井の政財界の著名人をはじめ、さまざまな人物が参加していた。会則では、「本会は汎く有能の士を集め、機会ある毎に懇談会を催し、自らを啓蒙すると共に、産業・工芸・農事の各面に、民主的文化を向上し、平和日本建設に寄与することを目的とす」と定めていることからわかるように、宗教団体というより、宗教的な価値観を背景に、戦後の福井の発展を願う各界の有志の集まりといった性格の団体といえる[「福井県文化史」編集委員会編(1963)]。

この「宗教懇談会」の連絡係として世話人的な役割を果たしていた前田岳洋が、ある日、沢村伍郎(当時、福井新聞主筆)を訪れ、会の目的があまりに広範囲で、かつ多目的すぎて運営が困難であるので、重点

的な目標を設定すべきであると相談を持ちかけた。それに対し、沢村は、占領下の日本において、「親と子を結び、国民と国民を結び、占領政策の威力も及ばない別天地に、悠久にして不退転な民族的土操を保持する、その役割こそ宗教ではないか」とし、さらに「幸いに福井県は仏教相応の地である。今こそ宗教家は、従来の形式仏教から脱皮して、社会運動家として起ち、国民再起に火を点すべきではないか。但しこれは仏教のみではなく、神道もキリスト教も同様だと思う」と答えた。前田は「深く感じるところ」があり、宗教家と接触をしはじめ、会合を開催するに至ったという[福井宗教文化協会(1951)]。

宗教関係者を多数招いた最初の会合は、1946年6月5日に福井市小山谷の丹巖洞で行われたが、この会合の出席者にはのちに「復興観音」の願主となった人物が多数含まれていることに注目しておきたい。出席者は、津田賢(大谷派)、出雲重信(本派)、善連法信(仏光寺派)、日下春英(誠照寺派)、細川堯山(曹洞宗)、西田隆演(真言宗)、稲葉文海(日蓮宗)、布谷海学(日蓮宗)、花房宏光(臨済宗)、西村智海(天台宗)、波多野正雄(本派)、沢村伍郎(福井新聞主筆)、前田岳洋の13名であり、うち3名(花房、沢村、前田)が「復興観音」の願主となっている。その後、さまざまな宗教家のほか、彫刻家の雨田光平やのちに宗教文化協会長となる松島格太郎(在家の人たちも加わり、名称を「仏教文化協会」とした[「福井県文化史」編集委員会編(1963)]。

同年7月4日、福井市小山谷の瑞源寺で会合が開かれ、21名が出席した。この時、「仏教文化協会」と「黎明懇談会」は、趣旨の根底に共通点があるとして、両者が合併し発展的に解消することになり、「福井宗教文化協会」が発足した。先に述べたように、その記念事業として、「復興慈母観音」を建立することになったのである。同年7月15日、福井駅前市場の復興市場に「復興観音」発願所を設置し、「復興観音建立趣意書」を発表すると、大きな反響を呼び起こした。

空襲を受けた敗戦後の混乱期に生きる人々に観音建立事業が共感を得たため、入会者が増加し、どこへ行っても快く会員名簿に署名をもらうことができたという。同年7月下旬、永平寺の熊沢泰禅貫首が「復興観音建立発願所」に参拝した際、前田らが趣旨を説明し、入会の署名を求め会員となっている。のちに、当時の民主党の総裁・犬養健も芦原温泉滞在中に前田と対面し、入会の署名をしている[福井宗教文化協会(1951)]。

同年7月18日には、戦災記念日の法要を行い、「戦災犠牲者の慰霊と平和日本建設と郷土福井の復興」を誓っている。その際、福井市復興市場係員各位から協力の申し出があり、信者から多額の寄付金が渡された。また、当日一般から「復興観音」への献句献詠等を募集しており、多数の句が集まったことで、機関誌『眞観』創刊号に「復興観音建立献句集」として掲載されている[福井宗教文化協会(1946)]。

同年8月3日、永平寺で会合が開催され、約50名が参加しているが、そのうち、「復興観音」に関係が深い人物としては、永平寺貫首の熊沢泰禅、花房宏光(瑞源寺住職、願主)、竹内武(市会議員、願主)、松島格太郎(「復興観音」発案者)、沢村伍郎(福井新聞主筆、願主)らが挙げられる。一泊二日にわたって議論が行われ、宗教論などとともに、発足記念事業である「復興観音像」建立については、「之は協会の美術家三輪信一氏外六名の委員を選出し県下に広く美術工芸方面の権威者の思案意見を求め作品の芸術的創意を検討の上作者を決することを一任」することが決定している。このとき可決された「協会の信条」は沢村伍郎が執筆したものであるが、その内容は、「戦後の混沌たる世情、戦争放棄、人間尊重の新憲法の制定を背景に、既成宗教の形骸化を批判し、新たな日本の建設のために宗教本来のあり方を追求する」[「福井県文化史」編集委員会編(1963)]もので、戦後に多数結成された文化運動団体と共通する問題意識を持っているといえる。

「福井宗教文化協会」は、僧俗一体となって活動を展開し、一時、会員数は福井県下で600名を超え、機関誌『眞観』を発刊していた。当初、会長や役員などの役職を一切設置せず、無組織形式をとっていたが、運営に支障をきたさない程度に、世話人18名が選出されることになった。世話人はそれぞれの職場で多忙なため、やがて、前田岳洋が運営事務にあたるようになっていった[福井宗教文化協会(1951)]。

「復興観音」をめぐる活動は非常に活発であったが、福井宗教文化協会それ自体はさほど進展をみせなかったため、同協会の一部の人たちによって、今成覚禅を中心に「万教一元同盟」運動が進められるようになり、全国的にも活動の範囲を拡げていった。

沢村伍郎の公職追放が解除されると、初代会長に推挙されたが、本人が固辞したことにより、主宰的な立場に前田岳洋が就任し、活動を展開していったが、年々精細を欠いていったという[「福井県文化史」編集委員会編(1980)]。前田は、宗教法人「自在苑」

を福井市宝永上町の自宅横に創立し、在家仏教福井支部の事務長も兼任し、「自在苑読本」を発刊するとともに、「万教一元同盟」による平和運動や、宗教運動を展開していたが、1957年に癌を患い64歳で死去した。前田の死後、沢村らの尽力により観音を安置する「福井慰霊塔」が建立され観音が安置されたことは先に述べたとおりである。

その後、福井宗教文化協会は、1965年3月27日、会長の酒井慶久(丸岡町・酒伊織物株式会社社長)が眼疾のため辞任した後、「復興観音」を発案した松島格太郎が会長に就任し、その後、1972年11月22日に松島が死去するまで同職にあった。その後、藤田善男が会長職につき、1980年代以降にも毎月第一土曜の午後に県民会館で会合を行い、講師講話の後、懇談研修を実施するなどの活動を行っていたことが確認できるが[「福井県文化史」編集委員会編(1963)]、その後の同協会の活動についてはよくわかっていない。

1970-80年頃の同協会の会則では、第二条に「慈母観音を中心に、会員相互の親睦を図り相協力し、宗教、社会、文化の活動により、社会の浄化に貢献する」とあり、また、諸事業として「慈母観音祭の開催」があげられるなど、この時期でも「復興観音」が活動の中心に据えられていたことがわかる[「福井県文化史」編集委員会編(1980)]。

§5. 「復興観音」はどのように受容されたか

これまで考察してきたように、福井の「復興観音」は戦後の宗教系の文化運動団体によって発案され、福井市など行政、市民との協力関係のもと建立されたが、「復興観音」は地域社会にどのように受け入れられていったのだろうか。札所の開設後、「復興観音」は願主や札所のある地域の事情に応じてさまざまな展開を遂げている。ここでは、「復興観音」の特徴を示す事例をいくつか取り上げて「復興観音」が地域社会にどのように受容され、変化していったかを検討する。

5.1 御詠歌の会の役割

「復興観音三十三札所」の各札所には、「西国観音三十三札所」になぞらえて、それぞれ対応する札所番号の御詠歌を唱えて参拝することになっている。例えば、岡保地区の「越之国観音三十三札所」・第十二番札所・岡保観音では、御詠歌は、元の「西国三十三札所」の第十二番札所である滋賀県大津市石

山町の岩間山正法寺の御詠歌を唱えることになっている。第十二番札所の御詠歌は、「みなかみは いずくなるらん いわまでら きしうつ なみは まつかぜのおと」であり、その意味は、「観音は音を観ずれば 岩の間より流れ出て谷川の岸を打つ波の音も 峰の松風の音も皆 法の声に聞こえる」である[岡保公民館(2012b)]。

福井震災や戦災とは基本的に無関係である「西国三十三札所」の御詠歌を唱える理由については、文献資料が残っていないため、関係者に聞き取り調査を行ったところ、以下の事実が判明した。多くの札所では地域住民を中心に御詠歌の会が結成されており、毎月御詠歌の会が開催されている。現在、「復興慈母観音札所」第14番・幾久観音の願主となっている小林勘峰氏によれば、200人以上の会員を擁していた札所もあり、御詠歌の大会に参加するなど、熱心に活動する人が多いという。また、「越之国復興三十三観音」第10番札所・永源寺では、奉賛会とともに御詠歌の会が中心となって慰霊行事を実施していたという。同札所の住職・小川義典氏に聞き取り調査を行ったところ、震災体験を伝える活動についても御詠歌の会が大きな役割を果たしていたとのことである。御詠歌の会の最盛期は昭和40年代で、現在では御詠歌の会は人数が減少したが、50人近くが参加しており、最盛期には100人以上参加していたとのことである。「復興慈母観音三十三札所」、「越之国復興観音三十三札所」とともに多くの札所の御詠歌の会が存在していた。

聞き取り調査によると、「復興観音」を祀る札所が御詠歌の会の拠点となっていることは、地域住民にとって、大きな価値を持っており、御詠歌の会員からの寄進や贈り物により札所に経済的な利益が得られるという。そのため、「復興観音」の願主が死去するなど、札所の継承が問題になると、係争が起きることもあった。現在では高齢化などのためほとんどの札所では御詠歌の会が解散してしまっている。御詠歌の会は、直接、福井震災や戦災の記憶そのものとは関係がないが、「西国観音三十三札所」になぞらえた御詠歌が各札所に割り当てられていることによって、札所に御詠歌の会がつけられ、会員が慰霊行事の運営にたずさわることなどにより、福井震災の記憶を伝える役割を担っているといえよう。

5.2 移転による「復興観音」の役割の変化

「復興観音」の札所のうち、創設時とは別の場所

に移転している事例がいくつかみられる。願主が代わったことによる移転や、新たに観音堂が新築され移転することもある。「復興慈母観音三十三札所」では13の札所、「越之国復興観音三十三札所」では10の札所が創設時とは別の場所に移転している(表1,表2参照)。ここでは、移転により「復興観音」の役割が変化したと考えられる事例を2つ取り上げ検討する。まず、「復興慈母観音三十三札所」第10番札所「花堂観音」の事例を取り上げたい。花堂観音は、最初期から「復興観音」建立事業に関与していた竹内武(福井市議会議員)が願主となった札所である。現在は、竹内武の子息で、福井市内の清水保育園の園長・竹内文憲氏が願主を継いでいる。「復興観音」の場所は、創設当初から何度か移転しており、現在は竹内文憲氏の妹の山崎麗子氏が園長を務める玉ノ江保育園の敷地内の小さな観音堂内に安置されている(図6)。



図6 「復興慈母観音三十三札所」第10番札所・花堂観音(玉ノ江保育園前)

Fig.6 Hanando Kannon: Stamp office for temple number 10 of the 33 temples that are visited during the restoration Kannon Pilgrimage.

両氏からの聞き取り調査により、「花堂観音」は以下のように移転したことが判明した。花堂公会堂前(創設時,1949) 秘鍵寺(浄土真宗寺院,1950年代に移転) 十一面神社(移転時期不明) 玉ノ江保育園敷地内(1986年9月1日)。公会堂から、浄土真宗寺院、そして神社、保育園敷地内と性格の異なる場所へ移転していることがわかる。～までの移転の理由や正確な時期は不明であるが、玉ノ江保育園敷地内への移転は、竹内武の妻・末子(竹内文憲,山崎麗子の母)が発案し、資金を提供して

移転したことがわかった。

移転経緯は、竹内末子が知人の「復興観音」の事情に詳しい人物(杉山法継)から、「花堂観音は戦災と震災の供養を十分に果たしたので今後は子供のためにお祈りするのにも良いのではないか」という助言により、玉ノ江保育園敷地内の移転することに賛同したとのことである。移転にあたって、当時の「復興慈母観音札所会会長であった法興寺の住職に「お精入れ」を依頼している。創設時の願主が竹内武であった事もあると思われるが、保育園敷地内に移転し、戦災と震災の供養から子供を守ることに主な役割が変化した事例として大変興味深い。

移転後、玉ノ江保育園では、観音堂の前を子供がとおる際にはお参りをし、巡拝会の際など、折に触れて「花堂観音」の由来と福井の戦災と震災についてわかりやすく説明することになっているとのことである。

別の事例として、「越之国復興観音三十三札所」第2番札所・坂井町観音堂を取り上げてみたい。坂井町観音堂に関しては、2000年に観音堂が新築された際の資料[坂井町福井震災観音堂奉賛会代表世話人会(2000)]が、現在の世話人である遵照寺の住職・五十嵐信雄氏宅に残されており、経緯を詳しく知ることができる。観音堂新設以前の状況については五十嵐氏に聞き取り調査を実施した。

表1:「復興慈母観音札所」一覧

札所 番号	観音名		寺院/在家(○)		願主		世話人		備考(所在地など)
	1949年	2012年	1949年	2012年	1949年	2012年	1949年	2012年	
1	万	靈		瑞源寺	藤間開市	花房禪佑			
2	八	代		○	角谷重吉	角谷幸雄			
3	桃	園		華蔵寺	五十嵐実雄	山内暎正			
4	乾		○	持宝院子安観音	三輪竹蔵	岡野浩行			
5	立	矢	○	東雲寺	生田篤治	武田瑞啓			
6	豊	島 ふれ愛	○	安養寺	小永 啓	武田瑞啓			
7	東	光		東光寺	辻 辰衛	野坂ゆかり			
8	だ	るま		○	坪川信一	たるまや福井西武総務部			だるまや内(1949年) だるまや外(2002年)
9	花	枝 昭 和	○	持宝院	梅田栄孝	大黒隆典			
10	花	堂		○	竹内 武	竹内文憲			花堂公会堂前(1949年) 玉ノ江保育園敷地内(2012年)
11	福	印 燈 明	○	瑞源寺	沢村伍郎	花房禪佑			福井印刷前(1949年)
12	和	田	○	養仙寺	渡辺綱吉	岩村ツキ子			和田八幡境内(1949年)
13	輝		○	○(法興寺)	加賀辰五郎	東宝内加賀産業			東宝前(1949年)
14	幾	久	○	△	勝木俊光	小林勘峰			小林勘峰氏宅(2012年) ※在家の真言宗僧侶
15	国	道 堀 端	○	常福院	小林 清	大黒裕實			
16	城	東	○	龍天寺	中川小二	加藤美徳			
17	手	寄	○	持宝院	広田吉蔵	大黒隆典			
18	浪	速 一 乗		一乗寺	中野広吉	尾崎彰宏			
19	北	野 浪 速	○	普賢院	竹内 可	高野隆宣			
20	吳	服		○	渡辺信治	渡辺 健			
21	照	手		法興寺	吉田卯太郎	杉山光寿			
22	乾	徳		靈泉寺	松山寿山	松山寿肇			
23	貨	泉	○	自性院	川中利一	光照良浩			
24	花	月		○	三井てい	三井ふじ子			
25	西	光		清宝院	池田 硬	中村正和			
26	西	山		西蔵寺	福地藤太郎	白崎良演			
27	足	羽		西念寺	大橋智慧	大橋智雄			
28	出	作		○	林 駒吉	山田勝三			出作会館内(1949年, 2012年)
29	相	生		西光寺	三井堯順	駒野興伸			
30	山	手		泰清院	河崎 豊	廣瀬訓三			
31	山	奥		通安寺	角亦一男	牧野孝昭			
32	子	安		○	吉村清一	桜井由子			
33	親			慈母観音堂 瑞源寺	宗教文化協会	花房禪佑			
番外1	-	不 動		不動寺		渡辺良憲			
番外2	-	※							元ふれ愛観音・6番に移動
番外3	-	日 和		○		上木敏二			
番外4	-	※							19番に移動
番外5	-	戒 本		戒本寺		中川信順			
番外6	-	開 発		○		黒川文弥			開発桜谷神社内(2012年)
番外7	-	福井大仏		光照寺		白崎良演			
番外8	-	弘 法		足羽山弘法院		白崎一休			足羽山西墓地内(2012年)
番外9	-	-							欠番
番外10	-	寿		自性院		光照良浩			

* 前田(1952)をもとに筆者の調査結果を反映させて作成
* 在家は、「○」で表示した

表2:「越之國復興三十三観音札所」一覧

札所 番号	寺院/在家(○)/観音堂(☆)/その他(※)		願主(1950年)	奉賛会長	世話人	備考(所在地など)
	1950年	2009年		1950年	2009年	
1	正瑞寺	総持寺	達川高志	大谷慈仙	安田法雄	璋瑞寺は廃寺
2	○	☆(坂井町観音堂)	竹本嘉二	竹本嘉二	五十嵐信雄	2000年に観音堂建立 通名「福井震災回向堂」
3		安穩寺	西島太郎	朝井文雄	藤井哲雄	
4		竜雲寺	岡田由右衛門	岡田由右衛門	伊藤俊彦	
5		受法寺	戸田末太郎	奥田 寛	本多 敬	
6		大学院	坪川 務	中村真教	中村泰夫	
7		菓師堂	寺尾登喜雄	三上初太郎	町内会遺族会	
8		☆(磯川家観音堂)	市村 栄	渡辺 軽	磯川利光	杜地区から譲り受け、 個人で管理
9	竜善寺	×	秦 妙善	秦 妙善	不明	所在不明(竜禅寺は 廃寺)
10		永源寺	梅森八太郎	小川拙応	小川義典	
11	○	☆(春江観音堂)	西畑忠吉	西畑忠吉	遺族会	1969-70年頃、観音 堂建立
12		☆(岡保観音堂)	水野 篤	水野 篤	林 利二	忠魂碑に隣接
13		☆(西藤島観音堂)	山形 寿	山形 寿	坪田庄治	忠霊塔跡地に観音堂 建立
14		安泰寺	田島外雄	松浦市郎兵衛	佐々木憲乗	
15		隆廣寺	五十嵐杉太郎	坪田十左衛門	五十嵐教雄	
16		永平寺	酒井いえ	酒井いえ	永平寺総務局	永平寺位牌堂内
17		受誓寺	川端小也太	松村伊佐吉	法山信照	
18		滝谷寺	宮川秀雄	鈴木喜三郎	貝谷隆尚	
19		光照寺	白崎良玄	白崎良玄	白崎良典	福井大仏は復興慈母 観音・番外7番札所
20		☆(森田観音堂)	吉田正一	吉田正一	町内会遺族会	越之國復興三十三観 音全ての札所の御朱 印あり
21	○	永平寺	酒井利雄	酒井利雄	永平寺総務局	酒井利雄宅から永平 寺に移転
22	○	※(河合忠霊碑内)	松川新助	松川新助	遺族会町内会	山室神社境内から忠 霊堂に移転(1953年11 月) 河合小学校敷地 内の石碑内に安置 (2002年)
23		東超勝寺	酒井多左衛門	酒井多左衛門	藤井 善	
24	○	慶信寺	八十島太郎	齊藤 薫	高柳顯爾	八十島近宅から、木 部小学校近くの忠魂 碑そばに観音堂に移 転 その後、慶信寺に
25		常福院	大黒隆念	大黒隆念	大黒裕實	
26		☆(大安寺観音堂)	酒井利一	大滝 馨	町内会遺族会	旧忠魂碑の石材を解 体し併用
27		禪林寺	岩佐次一	岩佐次一	光照良治	
28	☆(中山裕神社境 内観音堂)	○(橐公民館内)	山田多市	月輪孝成	橐公民館長	中山裕神社境内観音 堂から、橐公民館内 に安置
29		☆(石城戸馬頭観音堂)	友影賢世	奥永信之	高倉 忠	白道寺境内の石城戸 馬頭観音堂に安置
30		安楽寺	守内実乗	清水梅吉	鈴木玲子	
31	正名寺	称名寺	村中武右衛門	橋本 保	佐々木智夫	
32		大善寺	半田康六	女木 精	山田豊潤	
33	宗教文化協会	瑞源寺	前田岳洋	前田岳洋	花房禅佑	

* 前田(1952)、福井市宮ノ下千寿会編(2009)、重久(2002)をもとに筆者の調査結果を反映させて作成

* 在家は「○」、観音堂は「☆」、その他は「※」で表示した

当時の東十条村の村長であった竹本嘉二は、「復興観音」の願主と奉賛会長を兼任しており、観音の招来に熱心であったと考えられる。竹本は「復興観音」を、当時、開所してまもない坂井保育園内の一角に安置した。坂井保育園内には町の老人集会所も設置

されており、戦災・震災犠牲者の遺族は、この場所で追悼の祈りを捧げ、保育所の子供や親たちもまた震災記念日などでは参拝することになっていた。聞き取り調査によると、「復興観音」のそばには戦災犠牲者の名前を書いた掛け軸があったとのことである。保育

園と老人集会所を兼ねた、ある種のコミュニティセンターのような施設に「復興観音」が安置されていたことで、戦災と震災の記憶を付近住民に伝える役割を果たしていたと考えられる。

1999年、建物の老朽化により観音堂を解体撤去することになり、「復興観音」の「御動座」について、観音を管理する坂井町福井震災観音堂奉賛会は坂井町側から意向を確認された。同奉賛会では、新たに世話人会を設置して検討を重ねた結果、坂井町の支援を得て、建物跡地(上新座三十五号一番地)に小堂宇を建立し、移転することになった。また、この機会に新堂宇の傍らに石碑を建立し、観音堂の縁起および、物故者名を刻して追悼の意を後世に伝えていくことになり、石碑の建設費寄付を募ることになった。

2000年3月に建立された石碑「福井震災観音道記並に物故者名列記」には、震災犠牲者142名の氏名が記されている。観音堂内には「法名録」箱があり、戦病死者、震災死者、老人会死者が記されている(箱裏に1964年6月28日新調と記載あり)。観音堂の新築後は、毎年、遵照寺の住職に内諾を得、毎年6月28日の震災記念日に観音堂前で法要を営むことになっている。

住民からの寄付により観音堂を新築することができるほど「復興観音」は坂井町で大切にされていることがうかがえるが、保育園内に安置され、戦災と震災犠牲者の遺族、子供やその親、老人たちが祈りを捧げていた頃とは、役割が変化したことも否めない。観音堂によって「復興観音」に確固たる地位が与えられ、認知が高まったことは確かであるが、ここではその役割に微妙な変化があったことを指摘しておきたい。

5.3 西山光照寺における「復興観音」の位置

福井大仏で知られる光照寺が、福井震災の「復興観音」と関連があることはほとんど知られていない。光照寺は「越之國三十三観音」第19番札所となっており、本堂には「復興観音」が安置されている。願主は先代住職の白崎良玄である。また、福井大仏は「復興慈母観音」番外7番札所となっている。大仏下部の観音堂内には、「福井県人之霊」「福井県戦災死没者」「福井県戦争死没者」「福井県震水災死没者」の4つの大きな位牌が安置され、観音堂内の壁面には観音堂の再建に協力した奉賛会関係者の位牌が安置されている。また、「慈徳観音」という地区の有志によって建立された観音も安置されているが、これは震災犠牲者の供養のために地区で創られた観音であり、

以前は境内北東隅に慈徳観音堂が存在した。

以上のように光照寺は震災との非常に関連が深い。千年以上の歴史を持つ同寺には様々な歴史がある。ここでは光照寺において「復興観音」がどのように位置づけられているかを考察する。

光照寺の沿革概要は以下のとおりである[西山光照寺(2005)]。光照寺は、大同年中(806-809年)、現在の福井市一乗谷に最澄によって建立され、一条院と称した。一乗谷の地名はこの寺号に由来する。その後、戦国大名朝倉一族の一乗谷入城におよびその加護を受け、盛舜上人の時、寺号を光照寺と改めた。この旧寺跡は一乗谷に現存し、国指定の特別史跡として保存されている。慶長11年(1606年)、結城秀康の北ノ庄城下町経営の一環として、光照寺も末寺とともに北ノ庄(現在の福井)に移転、寺社奉行直轄寺院となり、北陸天台寺院の中心的存在となった。光照寺は何度か火災にあって再建されているが、以下では戦災と震災時の再建に限定して検討する。

1945年7月19日、福井空襲によって、光照寺は堂宇を全焼し、焼け残っていた石大仏も1948年6月の福井震災で崩壊した。震災以前から当時の住職・良玄和尚は、戦後いち早く復興のための浄財を求め、ご詠歌講中とともに托鉢を行っていたが、その際に震災が発生した。震災により福井市近辺まで大きな被害を受けたため寄付金を得ることが難しくなった。福井市では復興都市計画により、街並みを整備が進められ、光照寺の墓所は都市計画により足羽山に移転したが、区画整理によって境内地が狭くなっただけでなく、新設される市道が境内の中央に敷設されることになるなど、復興が困難な状況となった[西山光照寺(2005)]。

このような中、周辺住民や福井市の有力者からこれまで福井市のシンボルであった石大仏の焼失を惜しみ、その復興を願う声が起こるようになった。そこで、光照寺では行政の協力を仰ぐことになり、市議員を通じて当時の福井市長・熊谷太郎にその旨申し込んだところ、個人的にはあるが、市長の全面的な協力を得ることができ、熊谷市長を会長とする「光照大仏奉賛会」が結成され、奉賛会によって復興事業が実施されることになった。

福井大仏を福井市西部地区のシンボリック存在とするため、境内地の規模は震災前と比較すると約4分の1に縮小されはしたが、現在の場所に換地された。その後、檀家や福井市民全体からの浄財により、焼失前の石大仏を金銅大仏に代えて再建し(良質の

笏谷石が産出されなかったことが原因)、本堂、庫裏、山門と小規模ではあったが、全体が完成した。1956年8月5日、天台座主の来福を得て落慶法要が行われた。

光照寺には創建以来の多数の由緒ある仏像が安置されており、戦後という最も新しい時代に属する「復興観音」は必ずしも重視されているわけではない。以下、光照寺の諸仏像における「復興観音」の位置について検討する。『西山光照寺物語』(2005)では、光照寺の主要な仏像は以下のように紹介されている。

日本尊(阿弥陀如来立像:平安後期)、本尊(手違いの阿弥陀如来立像:鎌倉時代)、足引きの釈迦如来(室町時代)、聖観世音菩薩(平安時代)、福井大仏観音(1956年開眼)。

福井震災に関連する点については、日本尊は明治半ば頃まで一乗谷の旧境内地に安置されていたが、福井震災後に光照寺に遷座した。聖観世音菩薩は、福井大仏観音の本地仏であり、「お腹籠り聖観音」と称され、大仏の腹部に納められ、開帳の時期だけしか参拝できない。福井大仏観音は、先に述べたように「復興慈母観音」の番外7番札所となっている。札所になった時期は不明である。

福井大仏についての説明は以下のようになっている。福井大仏は当初、末寺の全龍寺(現在は廃寺)の本尊として、元禄四年(1691年)に開眼法要を営まれた。この時、仏頭のみ一乗谷から足羽川を下り船で運んだと伝えられている。この大仏は、安政年間の大火で崩壊し、再建された大仏も明治の大火で焼失しており、現在の大仏は福井震災による崩壊後、1956年6月に再々建されたものである。復興都市計画により、現在の地に寺が移転したことを契機に石から金銅にかえて建立されている。

光照寺境内の石碑には再建の経緯が記されている。銘文には、災禍を経ても胎内の聖観音像のみは難を逃れたので、「之を安置し奉って永く諸霊冥福と家郷安泰を祈念すべく有志相諮って福井大仏奉賛会を組織し、ここに再建した」ことが記載されている。また、再建にあたって、一切の設計を福井大学工学部に依頼し、従来の石大仏を金銅仏に代えたと共に台座及び寺院をコンクリート造りに改めて将来の災禍に備えると同時に近代感覚にふさわしい新様式を取り入れている。台座の内部を供養殿として中央に聖観音像を安置し、再建に協力した奉賛会会員各家の諸霊を配して常時其冥福を祈ることにしたという。全体の建設費用は、約2,500万円、大仏の座高は6.9m、

蓮台の高さが約1.5m、総重量は約11トンである。

「その他の仏さま」として紹介されているのが、「西山町の観音さん」と、「千手観音」である。は、「復興観音」とは別の三十三観音霊場「地の国観音霊場」の第20番、第31番の札所となっており、一般の参拝者には「復興観音」との区別が難しい。「越之国復興観音」であるは正式な名称が記載されておらず、「千手観音」とされ、説明文中で「震災後その犠牲者を供養するために新たに各所に霊場が新設された」とされている。戦災の供養の性格を持つことについては言及されていない。

光照寺では日本尊(平安時代)と、本尊(鎌倉時代)がもっとも重視され、聖観世音菩薩(平安時代)については、福井大仏の本地仏であり、大仏の腹部に納められていた「秘仏」であることが強調されている。福井大仏についてはかなり詳しく言及されているが、「越之国復興観音」については、第19番札所であるにもかかわらず、ほとんど説明がなされていない。「慈徳観音」については旧パンフレット(西山光照寺、年代不明)では観音堂の存在に言及されているが、『西山光照寺物語』では取り上げられていない。

千年以上にわたる光照寺の歴史のなかで、震災後に創建された「復興観音」はある程度の位置を占めるようになってはいるが、実際の関わりの深さに相当するほど重視して位置づけられていないのが現状といえよう。

§6. 「復興観音」における戦災と震災の記憶

そもそも「復興観音」は戦災供養のために創建され、「三十三札所」は戦災と震災の両方を供養する性格を持っているが、巡拝会に参加したり、聞き取り調査を行った結果、震災の観音であることが強調される傾向があるように思われる。ここでは、戦争犠牲者の記憶と関係の深い地区の「復興観音」の事例として、福井市東部に位置する岡保地区を取り上げ、「復興観音」における戦災と震災の関係について考察する。

6.1 岡保地区の忠魂碑と観音堂

岡保地区は、約350ha、戸数791、自治会14、人口2,573(2012年1現在)の兼業農家中心の農村地帯である。岡保地区には「越之国観音」第12番札所となっている岡保観音堂が、岡保小学校の南西部位の近接した場所にあり、すぐそばには忠魂碑がある。現在、岡保奉賛会が組織され、忠魂碑と観音堂の管理を行っている。奉賛会の目的としては、「岡保地区

における忠魂碑・観音堂の奉賛」「戦没者の道徳を敬崇し、併せて郷土愛の高揚につとめる」ことが掲げられている。事業として、「毎年一回、戦没者の慰霊祭」を行うこと、「忠魂碑並びに観音堂の清掃を実施し、試説の管理保護に努める」とある[岡保公民館(2012a, 2012b, 2012c)]。

岡保地区には岡保遺族会も組織されている。財団法人日本遺族会に所属した団体で、「明治維新から大東亜戦争などの戦いに従軍し犠牲となった方の遺族で、岡保地区に在住し、会の趣旨に賛同するものを中心に構成されている。目的、事業、活動などは戦没者の慰霊・顕彰が中心であるが、具体的活動には、忠魂碑だけでなく、観音堂の清掃奉仕も掲げられている。ちなみに、「復興観音」の調査を行っている。重久佐太一氏は、岡保遺族会の壮年部長および福井市遺族連合会参与・遺族相談員を務めている。

観音堂と忠魂碑については奉賛会のHPで説明されている[岡保公民館(2012c)]。説明によれば、戦死者165柱、震災犠牲者39名、その他1名が祀られている。忠魂碑が最初に建てられたのは、1916年7月、河水区の山麓であったが、1920年5月には、現在地である旧岡保村役場の南側に移転した。1945年8月、戦争が終わると進駐軍はこの忠魂碑の破壊を命じたため、村民は泣く泣く忠魂碑を取り壊したが、忠魂碑は心ある人の手によってひそかに土中に埋められ保管されたという。

「国難にあたり、命をかけて戦った方々をお祀りしないのは忍びがたい。忠魂碑に代わるものを建設しよう」ということで遺族有志により、1952年2月、観音堂の建設された。1952年9月、サンフランシスコ平和条約が締結されると、忠魂碑の再建を望む声があがり、1955年10月、村内有志の方々の手によって現在の地に再建され、今日に至っている。忠魂碑の碑銘板には戦死者142柱の名前が記載されている。

終戦50年の節目にあたり、岡保遺族会と奉賛会は、地区民から浄財を募り、忠魂碑の前に、石碑「護持のお願い」と「前卓」を作成し、敷地の整備や樹木の剪定を行った。また、観音堂の修復を行い、1995年6月には盛大に追悼法要を実施した。1998年の福井震災50周年にあたり、震災被災者の遺族も招待し、戦没者と合同の追悼法要を行っている。この時、岡保地区の村誌、掛け軸、石碑、位牌、英勲録、護国神社の資料などを調査し、正確な名簿を作成し、位牌の修正・追加を行うとともに、観音堂の由来と、戦没者165柱および震災被災者39名の名簿を堂内に掲示

した。

2011年12月には、観音堂と忠魂碑の大改修が行われている。老朽化した観音堂の軒垂木が数本雪により折れたため、屋根の緊急補修を行っている。また、観音堂東側外壁の損傷が烈しく、雨漏りがあるため、下見板の張り替えを行い、大きくひび割れのあったポーチや参道の補修も行われている。これらの補修の経費は、2011年春に解散した、軍恩連盟岡保分会からの寄付金に加え、岡保遺族会、岡保奉賛会、福井市英霊顕彰奉賛会の協力があつた。現在でも、観音堂の基礎台輪や外壁下見などの補修が予定されているが、資金の手当てが出来ないため、施工を保留している状態にあり、資金のめどがつき次第早急に着工したいとし、地区住民に協力を呼びかけている。以前、岡保観音には御朱印と黒漆塗りのご詠歌の板があつたが、現在所在が不明となっているため、情報提供を呼びかけている。

以上のように、岡保地区では、現在も観音堂は忠魂碑とともに地域住民に大切にされ、こまめに補修が行われるなどしっかり管理されていることがわかる。関連団体である、軍恩連盟連合会や岡保母子寡婦福祉会は高齢化と会員減少のため、それぞれ2011年3月末日、6月19日に解散しているが、今後、奉賛会と遺族会も同様の問題に直面し、観音堂と忠魂碑の管理が課題となると思われる。

6.2 「豊島観音」と「戦災復興慈母観音」

近年、震災と戦災の観音の関係性が問題になっている事例として、「復興慈母観音」第6番札所・豊島観音を取り上げる。豊島観音は、2011年、河川工事の際、福井県により取り除かれたため、外記様町観音奉賛会によって震災供養のため「泉観音」が新しく作られた(図7)。「泉観音」の「お精入れ」は、2011年12月25日に実施されている。

問題なのは、元の「豊島観音」像が、観音堂に設置された由来を記載した説明板ともども所在不明となっていることである。また、新たに作られた「泉観音」は震災供養のみで、戦災供養の要素が失われていることも重要である。聞き取り調査によれば、外記様地区には以前から「戦災復興慈母観音」が存在するため、「泉観音」は地域の震災供養の観音という位置づけになったとのことである。このような状態になったのは、「豊島観音」が「復興慈母観音三十三札所」の札所であることの意義が見失われたことに原因があると考えられる。



図7 泉観音
Fig.7 Izumi Kannon.



図8 「戦災観世音菩薩」(外記様地区)
Fig.8 Fukui Air Raid Victims Kannon at Gekisan area.

そもそも、外記様地区の「戦災観世音菩薩」は、「復興慈母観音」とは異なる観音である(図8)。「戦災観世音菩薩奉賛会」の会計事務を担当してきた中川清が作成した資料[戦災観世音菩薩奉賛会(2003)]によれば、この観音の由来は以下のとおりである。「戦災観世音菩薩」は、1957年7月20日に、空襲の死者が最も多かったこの外記様地区で次男を亡くした木下政治という人物が個人で発願し、当時の福井市長・熊谷太郎の協賛を得て開眼法要を行った観音である。以来毎年、木下が個人負担で法要を営んでいたが、1976年2月20日に木下が死去すると、同年の法要を営むことができず、やむを得ず町内会が引き受けることになり、吉田良実という人物が一切の世話役を引き受け、以後法要を営むことになった。しかし、1980年4月28日に吉田が死去すると、運営が頓挫することになるため、新たに「戦災観世音菩薩奉賛会」が同年7月に設立され、以後現在に至るまで法要を継続している。2012年12月に、「戦災観世音菩薩」は外記様町の慰霊碑奉賛会により「戦災慰霊碑」に建て替えられた。

「復興慈母観音」は、戦災と震災供養を兼ねあわせた性格を持っており、外記様地区の「戦災観世音菩薩」とは別の役割を果たしていたのだが、その由来が見失われたため、「豊島観音」は震災供養、外記様地区の「戦災観世音菩薩」は戦災供養という理解が生じたことにより、「豊島観音」の代わりに新設された「泉観音」は震災供養のみと位置づけられるようになったと考えられる。「泉観音」新設にあたって、「復興慈母観音札所会」から脱退したため、「復興慈母観音三十三札所」第6番は欠番となり、番外2札所であっ

た安養寺の「ふれ愛観音」が「昇格」することになった。「豊島観音」をめぐる一連の変化は、「復興慈母観音三十三札所」の由来が見失われたことが顕著に表れた事例といえるだろう。

以上から、「復興観音」における戦災と震災の記憶は、ともに多数の犠牲者を出した出来事として、地域社会ではその供養が「復興観音」で同一に行われてきたが、時間の経過により、今後の継承が問題となっているといえる。

§7. おわりに - 「復興観音」の現状と課題 -

これまで見てきたように、創設当初から長期にわたって「復興観音」は、「三十三札所」の設置、巡拝会や御詠歌の会の存在など、震災・戦災の記憶を伝える様々な工夫を凝らしたシステムとしてうまく機能してきたが、近年、その問題点が顕著になり、機能不全を起こしているように思われる。「豊島観音」の事例は「復興観音」の由来や背景が見失われつつあることをよく示している。

「復興観音」の機能不全の原因については、創設から60年以上の年月が経過したことによる体験者および創設関係者の減少の影響が大きいといえるが、システムに関する原因としては、「復興観音」の特徴である在家が願主となる仕組みが問題となっていると考えられる。当初、札所周辺の住民に親しまれるといった長所が発揮されたが、願主の死去や高齢化によって札所を維持できなくなると、引き継ぎが大きな課題となってきた。次第に札所の「復興観音」が有縁の寺院に引き取られるようになり、現在では在家の札所は10ヵ所程度に減少している。

また、札所周辺の住民に親しまれた御詠歌の会は時代の変化とともに人数が減少している。巡拝会は100人以上の参加者が大型バス2台で巡拝していた頃とは異なり、筆者が参加した2012年には10数名の参加者が小型バスで巡拝する状況となった。さらに、2013年には復興慈母観音札所会が主催する巡拝バスが廃止となり、各札所が参拝者に個別に対応する形式となった。現在、「復興観音」は存続の危機に直面しているといえる。

福井震災の「復興観音」には、現在の我々が学ぶべき震災の記憶を伝える知恵や工夫が数多く存在する。それらを学びつつ、機能不全を起している部分については現代に適合した記憶の伝え方を模索していく必要があると思われる。本稿が福井震災の「復興観音」を再発見する契機の一つとなれば幸いである。

謝辞

本稿をまとめるにあたっては、瑞源寺住職・花房禅佑氏、復興慈母観音奉賛会会長・大橋智雄氏、竹内文憲氏、山崎麗子氏、小林勘峰氏、重久佐太一氏、久津見守雄氏、竹澤信治氏、福井県文書館の柳沢芙美子氏にお世話になりました。その他、復興慈母観音札所の関係者の方にお話を聞かせていただきました。記して感謝します。

対象地震：1948年福井地震

文献

浅野清編，1990，西国三十三所霊場寺院の総合的研究，中央公論美術出版。

「福井県文化史」編集委員会・福井県文化協議会編，1963，福井県文化史 1945-1962，福井県文化協議会，280-293 pp.

「福井県文化史」編集委員会・福井県文化協議会編，1980，福井県文化史 1963 - 1979，福井県文化協議会，333-335 pp.

福井市編，1978，福井烈震誌，福井市，1206-1211。

福井市宮ノ下千寿会編，2009，越之國震災復興三十三カ所観音霊場，福井市宮ノ下千寿会。

福井市歴史ボランティアグループ「語り部」編，2007，福井御城下 三十三カ所観音霊場，福井市歴史ボランティアグループ「語り部」。

福井宗教文化協会，眞観，1946，創刊号，福井宗教文化協会。

福井宗教文化協会，眞観，1949，第2号，福井宗教文化協会。

福井宗教文化協会，眞観，1951，第4号，福井宗教文化協会。

復興慈母観音札所会，1998，復興慈母観音霊場 巡拝の手引き，復興慈母観音札所会。

春江町震災記念誌編纂委員会編，福井震災 語り継ぐわが町の記録，春江町。

熊谷太三郎，1963，戦後の福井市復興について，NHK ラジオ放送記録，私家版，10-11 pp.

前田岳洋，1952，観音巡拝案内，宗教文化協会。

松島格太郎伝記編纂会編，1975，松島格太郎伝，松島格太郎伝記編纂会，146-173 pp.

西山光照寺，2005，西山光照寺物語 福井遷座 400年記念，西山光照寺。

西山光照寺，年代不明，福井大仏西山光照寺，西山光照寺。

岡保公民館，2012a，地区の概要・特色

<http://www1.fctv.ne.jp/okabo-k/index.html>

岡保公民館，2012b，岡保奉賛会，

http://www1.fctv.ne.jp/okabo-k/izokukai/hou-san_top.html

岡保公民館，2012c，岡保遺族会，

http://www1.fctv.ne.jp/okabo-k/izokukai/izokukai_top.html

西国三十三所札所会編，2008，西国三十三所結縁御開帳公式ガイドブック，講談社。

坂井町福井震災観音堂奉賛会，1998，福井震災 50周年追悼式関係綴，坂井町福井震災観音堂奉賛会。

坂井町福井震災観音堂奉賛会代表世話人会，1999，坂井町福井震災観音堂建立について，坂井町福井震災観音堂奉賛会代表世話人会。

戦災観世音菩薩奉賛会，2003，奉賛会規約を含む会計書類外諸覚書等一切綴（遺族縁故者名簿），戦災観世音菩薩奉賛会。

重久佐太一，2002，復興越之國観音三十三札所一覽，私家版。

重久佐太一，2002，忠魂碑と観音堂について，私家版。

